

大会講演

2009年10月のNHK学園市川オープンスクール開講に伴い、2010年4月8日に市川市文化会館てこなホールにて、初めての市川市短歌大会を開催しました。

9回目を迎えた伊香保短歌大会は、これまでの8回以上に盛況で、伊香保温泉ホテル天坊は熱気に包まれました。

NHK学園生涯学習フェスティバル

●市川市短歌大会

とき／二〇一〇年四月八日（木）

ところ／千葉県市川市・市川市文化会館

演題 うたうということ

講師 尾崎左永子先生……3

●伊香保短歌大会

とき／二〇一〇年五月二十日（木）

ところ／群馬県渋川市・伊香保温泉ホテル天坊

演題 短歌という迷宮

講師 栗木京子先生……11



「うたうといふこと」

尾崎左永子

皆さまこんにちは。尾崎左永子でございます。鎌倉から、快速一本で来ました。こんなに近いとは思っていませんでした。古典の仕事で真間手兎奈や里見城、須和田の土器のことで、よくこの辺りを歩いていましたが、久しぶりに来てみたら、あまりに様子が変わっているのでびっくりしています。今日は、「うたうといふこと」を題にお話ししようと思っていました。歌を作っていると歌論を言っても仕方がないと思います、私が今考えていることを、少しお話ししてみます。

皆さん、歌を作っているとしゃいます。この頃「歌を書く」とおっしゃる方が多いですね。歌というのは、本当は書くのではなく、以前は詠むと言っており、口で歌うものだったと思っております。

まだ、字のない頃から詠われていたわけでしょう。「歌」という言葉の原点は「打つ」からきているという説もあります。手を打つなどのリズムですね。酒宴の時などで酔ってくると、自然に大きな声が出て、何かを打ちながらリズムをとって歌った。それが歌の発祥だといわれています。ところが、この頃の歌はそういう「歌う」ということを忘れていくように感じ、気になっていきますので、そのことを申し上げたいと思います。

歌って楽しむ短歌

口から出す言葉であるほうが良いとすれば、そこに声があるし、音があるわけです。そしてリズムがある。例えば俳句、これは短歌から発生した五七五ですが、短歌

は五七五七七七という定型をもっていますね。定型というものが、なぜ千三百年間も受け継がれてきたのでしょうか。

やはり、それは日本人の中にとってもフィットする詩形だったからだろうと思うのです。それは目で読んで理解するものではなく、声で聞いて耳から入ってわかるというのが本当だろうと思います。

歌謡曲には七五調のものが多くあります。昔、寺山修司が「世界中を五と七で満たそう」と言いましたね。ちょうどその頃、フランク永井の『有楽町で逢いましょう』が流行っていたのですが、あの歌をちょっと数えてみて下さい。「有楽町で逢いましょう」と、ちゃんと七五です。こういう七と五で日本中を満たしてしまおうというのが彼の発想でした。

そういうことに案外気が付いていない

て、歌謡曲は歌謡曲、短歌は短歌でもっと文学的なものだと考えていらつしやる方が多いと思います。歌謡曲というのは「歌って楽しむ」というところがあると思います。が、「言葉を使つて気持ち伝える」という面では非常に似たところがあるはずで

す。
『りょうじんひのしやう梁塵秘抄』など中世の今様では仏教のことなどもすべて七五調でいっていますし、それを継いだのが与謝野鉄幹、上田敏などの新体詩ですね。島崎藤村の「小諸なる 古城のほとり」、これも五七です。そういうことを考えると、やはり歌う詩の一種であるという基本を忘れないほうがいいのだらうと、かねがねから思っています。今は、どんな歌を作つてもかまいません。「おとなりの犬がうるさいよ」という歌でもかまわないし、「そんなことを言うのはかわいそう」というのも歌になります。これを五七五七七で言い合えばけんかにならなくて済むだらうと思うこともあり

ます（笑）。
今、「七と五」とか「五と七」と言っています

りますね、これは納得してただけでしよう。このリズムと、もうひとつは音韻です。「あいうえお、かきくけこ」という音のつながりが美しくないと、つかえたような歌になつてしまいます。作つていらつしやる皆さんはご存知だと思います。

例えば「あ」、あ行音というのは非常に明るい音を持っています。「お」は少し厳か。皆さん、実際に音を出してみても下さ

い。同じ高さで「あ」と「お」を出してみるとどうです、「あ」のほうが明るいでしょう。「お」のほうが少し重くて、莊嚴。

「い」はどうでしょう。細いですね。鋭さがあるので、涼しい感じの時にこの音が入ってくる人が多いですね。

では「う」はどうでしょう。これは歌つていてもわかりますが、こもっています

ね。「冬籠り」という言葉で見ると、「ふ、ゆ、ご、も、り」は「う、う、お、

お、い」ですね。中にこもっているような、それでいて中は温かくて、外はなんとなく重くて寒い、そういう感じですね。言葉の中に、皮膚感覚で捉える音感がすでにあるわけです。これを音韻と言っています。

ずいぶん前になりますが、NHKラジオで二十年ほど「夢のハーモニー」という番組を書いていたことがあります。音だけでは伝えられませんから、いろいろと工夫しました。その経験から気が付いたことは、歌の中でも音感・音韻は十分に生かせるのです。ですから、私のところに習いに来る方には、自分の歌を覚える、目で見るのではなくて、覚えて鏡の前で自分の歌を言ってみるように教えています。

鏡の前で自分の歌を言えますか？ 言ってみると意外と言にくいこともあって、そこを直すことでいい歌になることもあるわけです。字にとらわれないで、律や音韻などの音楽性のようなものを、ぜひ大事にしたいだきたいと思っています。

その時代の現代短歌が古典

「うたうということ」について、せっかくレジュメを作りましたので、これをもとに時間までお話ししたいと思います。いちばん最初にあるのは『万葉集』です。巻十四ですから、「東歌」あづまうたですね。誰が作ったか

はわかりません。私が今住んでおります鎌倉の歌で、万葉がなもつてあります。

ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬川に潮満つなむか

麻可奈思美 佐祢尔和波由久 可麻
久良能 美奈能瀬河泊尔 思保美都
奈武賀

そこに住んでいた人の歌でしょうね。

東歌というのは、大伴家持が防人として連れて行った東国の兵士たちから書き取ったのではないかという説があります。その頃は、東国にはまだ文字がなかったので、大伴家持か、あるいは父の旅人かもしれないが、字に写したのでしょう。これは家



持の美学かと思えます。「麻可奈思美」と

「思う」とか「美しい」という字が入っていますね。「佐祢尔和波由久 可麻久良能

美奈能瀬河泊尔 思保美都奈武賀」ここにも「美しい」「思う」という字が入っています。他にもこの読みの字はたくさんありますが、この字が使われています。

内容は、意外と激しい歌で、「もう、ほんとうにかわいいからさ、あの子を抱きに行くんだよ。鎌倉の美奈の瀬川を渡って行くかと思っているけれど、今頃、潮がいつぱいになって渡れるかなあ」という歌です。とても率直です。当時は通い婚ですから、女の家に通います。相手は奥さんだと思っていなくてもいいかもしれません。

もうかわいくてかわいくて仕方がない、「麻可奈思美」です。「佐祢尔、寝に行く。さあ、これから行くんだ。鎌倉の美奈の瀬川を越えて行かなければならないけれど、潮が満ちていて越えられなかったらどうしよう。とても率直でいい歌です。このように一字一字に書かれるということは、当時、歌われてはいたけれど文字に書くことはなかったでしょう。それを採集したも

のだと思えます。このように、文字もなく教養もない人が、今に伝わる歌を残している。それはどういうことでしょうか。やはり

歌というものは、本当の気持ちを表すことがとても大事なのだという気がします。

時代が下がりまして、次の歌です。

やどりして春の山辺に寝たる夜は夢
のうちに花ぞ散りくる

『古今和歌集』にある紀貫之の有名な歌です。『古今和歌集』ができたのは西暦でいうと九〇五年頃、十世紀の初めです。

言葉としては「山辺」とか、今は言わないうちがいいと言われていますが、内容は今風ですよ。『夢のうち』も甘いと言われそうですが、『古今和歌集』というのは、古の歌と今の歌を集めた、初めての勅撰和歌集です。これは当時の現代短歌といえます。九〇五年といえますから、千百年前の現代短歌、現代詩です。それと同じように、『万葉集』もその時代の現代短歌です。「夢のうちにも花ぞ散りくる」などは、とてもきれいだと思えます。こういうきれいな歌は、今の時代にふさわしくないのかもしれないが、

私はアララギ系でしたから、兄弟子たちから『古今和歌集』などという下らないものは読むな」と言われて来ましたが、『源氏物語』を読み始めたら、『古今和歌集』を知らないと一文字も読めません。そこで読んでみると、非常におもしろい。当時の現代人がどういうことを感じていたのか、とてもよくわかります。

次は『新古今和歌集』、式子内親王の歌です。『新古今和歌集』は一二〇五年頃に編まれていますから、『古今和歌集』からちょうど三百年ぐらいあとのものです。三百年ごとに現代歌がこのように変わっていくわけです。一二〇〇年頃の現代詩です。

はかなくて過ぎにし方をかぞふれば
花に物思ふ春ぞ経にける

白洲正子さんが『花にもの思ふ春』という随筆集を出していらつしやいますが、この歌も今でもよくわかる歌ですね。

作者は内親王ですから、さまざまな乱に巻き込まれてひどい目にあつていらつしやいます。ずっと独身で過ごされ、いい歌をたくさん残されました。「花に物思ふ」です。それから今頃の季節でしょう。先ほ

どの歌も「花ぞ散りくる」で、今頃です。三百年経つと、「花に物思ふ」という憂愁の歌の素材として定着してきたわけです。そして鎌倉時代に入ります。源実朝の有名な歌が出てきます。

大海の磯もとどろによする波われて
砕けて裂けて散るかも

皆さんもご存知だと思います。私は、自分が王朝文学が中心なものですから、鎌倉文学はまったく無知でした。一昨年、集英社のビジュアル新書で『鎌倉百人一首』を歩く」という本を書きました。その前に鎌倉ペンクラブで「鎌倉百人一首」を選んだのですが、その時に否応なく鎌倉の歴史も歌も、ずいぶん読まされたわけです。けっこういい歌がありました。武家社会ですから、歌はだめだろうと思ひ込んでいたが、とんでもありませんでした。

御成敗式目を作った北条泰時は、歌もとてもうまいのです。源家も平家もともと天皇家の分派ですから、伝統的な文化を非常に大事にしているわけです。政治家もみんないい歌を作っていました。その中で、トップにいた実朝の二十歳ぐらいの時の歌

です。「金槐和歌集」ですね。「金」というのは鎌倉を意味しています。「槐」というのは槐門、大臣のことです。「金槐」は鎌倉の右大臣という意味だそうです。

この歌、本当に海辺にいて感じたことには違いないのでしようけれど、「われて砕けて裂けて散るかも」と、強く言っています。七里が浜のあたりには、サーファーたちがたくさんいます。それを見ていたら、実朝の歌と重なりました。当時の現代短歌でも、若者の歌ですね。「弟が殺され、父も亡くなり、兄は謀殺され、自分もそう長くはないだろうという、悲しみを詠ったのだ」という解釈が多いのですが、普通に読んでみるとそうではないように思うのです。うわあつとした若者のエネルギーをそのまま体感的に詠っているのだろう、海を見ていてそういう感じを受けたのだろうという感じがしています。そして、これが当時の現代短歌だったわけです。

五七五七七という型の強さ

江戸時代に入ると、どちらかといえば中

世からの流れで、雅なものを伝えるだけの、創作ではない短歌がはやってきます。

明治になって、やっとその流れが終わり、新しい文学が起こつてきました。その時に与謝野晶子が出てきます。

鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男に
おはす夏木立かな

鎌倉にいらしたら、だいたい大仏様にはお寄りになると思います。その裏に本人の字の歌碑が建つております。もともとの原作をこの前見せていただきましたが、非常に細いきれいな字です。

この歌には、お釈迦様を「美男」と言い切るすゝさがあります。当時はだいぶ叩かれたようですが、今見ると、よく仏様を美男と言いつつなという気がします。

なぜこの歌を口伝えのように、みんなが覚えていいのか。本当にそう感じたということ、もうひとつは音楽性だと思えます。本来、釈迦牟尼というのは阿弥陀如来の意味だそうです。だから、あれは間違いだとおっしゃる方も多いのですが、大衆にとっては釈迦牟尼でも阿弥陀仏でも同じ仏様ですから、これでいいのだらうと思いま

す。実際に『吾妻鏡』を見てみると、阿弥陀仏とは書いていなくて釈迦如来と書いてあります。これはこれでいいのでしょうか。

このように、時代によってそれぞれの現代詩というものが変わっていく。でも、ここに伝えられているものは全部、五七五七七という型をきちんと伝えていくことを重要視しているのだと思います。

次の歌もご存知でしょう。

手套てがわを脱ぐ手ふと休む

何やらむ

こころかすめし思ひ出のあり

有名な啄木の歌です。とても現代的な内容ですね。資料では三行書きにしているのですが、わかりにくいかもしれません、教えてご覧になれば、五七五七七をきちんと守っているのがおわかりいただけると思えます。これも有名な歌で、

はたらけど

はたらけど猶なほわが生活くらし楽たのしみにならざり

ちつと手てを見る

がありますね。これを破調だと思ひ込んでいる方が多いのですが、数えてみると三十一音です。切りどころがちよつと違います

が、三十一音きちんと入っています。

そして、昭和に入り戦争がありました。それが終わった頃の斎藤茂吉の歌。

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆ

ふべとなりけるかも

有名な歌ですからみなさんご存知だと思います。同じ頃、

最上川流れのうへに浮びゆけ行方な

きわれのこころの貧困

という歌もありました。非常に悲劇性の強い歌が多く、これも戦後の歌です。憂愁が込められています。

馬場あき子さんは、「この歌は東北弁で読まなければ本当ではない」と言います。彼女のお父様が福島で、東北弁の真似をするのがうまいんです。それが斎藤茂吉の本当の歌だと。私もそう思います。

斎藤茂吉記念館に行くと、玄関で再生した歌を聞かせてくれます。その中にこの歌があつたかはわかりませんが、馬場さんに教えられたように読むと、いつそう深さや太さが出てきます。やはりこれも、音楽的なものを生かしたところがありますね。五七五七七の強さはたいへんなものだと思います

ます。

『白き山』に同じ頃、

オリーブのあぶらの如き悲しみを彼の使徒も常に持ちてあたりや

という歌があります。「使徒」というのは十二使徒、パウロのことだといわれています。「オリーブのあぶらの如き」、今はオリーブオイルを使うのでおわかりになると思いますが、白絞め油しろしめあぶらやなたね油ではなく、オリーブオイルなのです。黄色くてろんとしていて、ゆらつと揺れるけれど流れるのには少し時間がかかるような、そういう悲しみだといっているわけです。

「オリーブのあぶらの如き悲しみを彼の使徒も常に持ちてあたりや」——自分が持っているのでしょうか。パウロもいつもこういう悲しみを抱えて生きていたのだろうか。終戦後の悲しみだと思います。こういうところにも、型の本当の生かし方があるのです。先ほどの「ふぶくゆふべとなりにけるかも」も、「常に持ちてあたりや」もリズムがあるのです。それも重いリズムです。この音楽性の生かし方というものを、私たちは忘れてはいけないのだと、いつも

思っています。

斎藤先生の一番弟子で、私の恩師でもある佐藤佐太郎の歌に、

冬の日の眼に満つる海のあるときは
一つの波に海はかくるる
一つ一つの波に海はかくるる
があります。「開冬」にある一首です。

海に向かっている。「眼に満つる海」、これがすごいのです。一面に海だけが見えている。そんなに広い海なのに、ある時わあっと波が立ってくると、その大きな海全体がひとつの波に消えてしまうという……。これはすごい発見だと思います。

短歌というものは、朗々と読めるリズム感と音感が充分でないと、良い歌とはいえないのではないのでしょうか。

律を守り、音感を捉える

手のひらに豆腐をのせていそいそと
いつもの角を曲りて帰る

山崎方代の歌です。この人も鎌倉の人で、右左口村うさぐちのことを思った歌集『左右口』に入っています。

この歌は死ぬ前に小さな草庵を借りて住



んでいた頃の歌と解釈していますが、実際には横浜にいた頃の歌のようです。でも「横浜で」というより、小さな角を曲がって草庵に帰るというイメージです。今のようなスーパーで売っているビニールパックのお豆腐ではありません。お豆腐屋さんに行つて、手の平の上で切ってもらつて、お鍋などに入れて帰つた頃の歌です。

「手のひらに」「のせて」「帰る」というところに、いかにも体感があつて、それだけで「いそいそ」ですね。帰つたら、これを肴さかなにお醤油だけでいい。「青じそのはな」という有名な随筆集がありますから、青じその葉っぱでも刻めば、お醤油ひとつで焼

酎でもおいしく飲めるわけです。安酒でいいのです。そういう気持ちで非常によく出ている。「いそいそといつもの角を曲りて帰る」、何でもないことですが、「いそいそ」といつもの「い」の字が重なっています。不要な飾りがまったくない。歌を歌う時に、余計な飾りがあって覚えきれないこととってありますよね。

率直ということは音楽性を磨き出すと、私は思っています。そして、音韻の響きというものがそれを支えていくのです。

終りなき時には入らむに束の間の後あと前まへありやありてかなしむ

これは土屋先生の有名な歌で、奥様が亡くなられた時の歌です。

「終りなき時には入らむに」、永遠の時に入るといふことは死ぬ時、終の時に入ろうとしているということです。ご自分も奥様も、残り少ない命だと思っているのに、ほんの少しの「後前」がある。そういうものがあるのか、いや実際にあつて悲しいことだと言っているわけです。平らかに言っています。非常に深い歌だと思えます。

「束の間の後前ありや」と自分に問いかけ

て、考えたら本当にあるのだと現実を直視し、しかもただ「かなしむ」という一言だけで終えています。この刻み方も見事です。ずっと老年になられてからの歌です。このように、『万葉集』から土屋文明までを例に挙げてきましたが、五七五七七というリズムが、千三百年の間ずっと伝わってきて廃れていないのです。これは日本の詩として大事なことです。

反対に、下手でもなんでもこの型に入れて「五七五七七ですからこれは歌です」と言われたら、「そうですか」と言わなければなりません。本当の短歌というのは、この律をきちんと守った中で、音韻、美しい響き、こつこつした響き、あるいはぎくしゃくした響きなど、そういう音感をきちんと捉えて作っていくのが前提ではないかと、この頃考えています。

「うたうということ」は、音楽性が大事なのだと言いたくて申し上げました。

楽な息遣いで「うたう」こと

先ほど「あ」「い」「う」などのお話をし

ましたが、行によってはどうでしょう。「あいうえお」、これは母音ですから基礎的な音感です。「かきくけこ」はどうでしょう。「かきくけこ」と「さしすせそ」ではどう違うのでしょうか。わかっているつもりです。わかっていらつしやいますね。「かきくけこ」は、こつこつした角がありますね。「きこきこきこ」「かくかくかく」など、なんだか屈折があるような感じですね。

では、「さしすせそ」はどうでしょう。言ってみて下さい。「かきくけこ」とは違うでしょう。さわやかですね。透き通ったような感じですね。

では、「かきくけこ」に濁点がついたらどうなりますか。「がぎぐげこ」、もつと分厚くて鈍くて、しかも角がある。「ゴジラ」などがそうですね(笑)。

「さしすせそ」だと、「さ」はきれいですよね。皆さん、「さ」という接頭語を使うことが多いありませんか、「さ霧」などのように。「さ霧消ゆる湊江の」という歌がありますね。お使いになつてもいいのですが、うっかり使うと難しいんですよ。

例えば「狭庭」といえば「狭い庭」と書

きます。「わが狭庭……」とおつしやる方もあります。しかし「古事記」をお読みになるとわかると思いますが、「さ」というのは「神前」という意味があるのです。「狭い」という字を当てているからといって、狭いわけではありません。「さ霧」もそうです。気持ちのいい霧、涼しい霧という感じですか。「み」も同様に、神様に捧げる言葉に「み」が付きます。「我が狭庭春めきて……」というような歌をよく見かけるのですが、「狭庭」とは言わないで下さい。「わが庭」くらいにしておいて下さいと言っておきます。

昔、一音語というのがありました。体を表す身体語には、この一音語が多いですね。「目」「手」「背」などです。それにいろいろな言葉がついています。「まゆ」の「ま」は目のことです。「毛」もそうです。一音語にはいろいろな言葉があります。非常に古くて意味があることがありますが、うっかりきれいな言葉だと思って使うのは、思わせぶりになり易いのでやめておいたほうがいいでしょうね。

すべての行についてお話しできませんの

で、「まみむめも」にとびます。この音はどうでしょう。艶やかで気持ちのいい音ですね。艶があつてまろやかな感じですよ。

名前で言うと、美しいと書いて「み」と言いますね。皆さんのご年代ですと、「美」がつくお名前が多いのではないのでしょうか？ 今は、「子」が付かない、二度と書けないような字の名前のお子さんが多いようですが、少し前だと美佐子さん、美代子さん、和美さんなど、「美」の付く名前が多かったですよね。これはいいことだと思つています。知らず知らずのうちに、名付ける親が美しさを感じて付けているに違いないからです。皆さんもそういうことを知らないうちになさっているはずですよ。

その、音の感覚というものを、短歌を作る時にも考えて下さると大名作ができるかもしれせん。百、二百、三百と作れば、確かに作っただけうまくなると思ふんです。今度は、捨てていくことがなかなかできなくなります。捨てることを覚えると、間がだんだんと伸びていくわけですね。そうすると、楽に息が入るようになります。隙間ができると、何でも詰め込む時

期というのがありますが、それをやめて、のびのびとしたところに休止符を入れるといえ方がいいでしょうか。

私は、意味のない言葉、色のない言葉を入れるといっています。色のない言葉を入れていくと、息遣いが楽になります。息遣いが楽になることが、「うたう」ことにはとても重要なことだと思つています。

詰め込みすぎた歌を作らないほうがいいということですよ。千年後に残る歌になりません。百年後に、一つ残れば御の字だと思つています。自分の心に本当に響いてきた歌のほうがいいものです。千に三つだと「千三つ屋」になってしまいますから、百に一つということでも少し増やして、それを心得て歌を作る時にはぜひ、律と音韻を大切に、音楽性を大切に作っていただけたら、本当の「うたう」ということになっていくのではないのでしょうか。ぜひ試してみてくださいと思います。

時間がきましたので、ここでやめさせていただきます。ありがとうございました。